

上水記

一

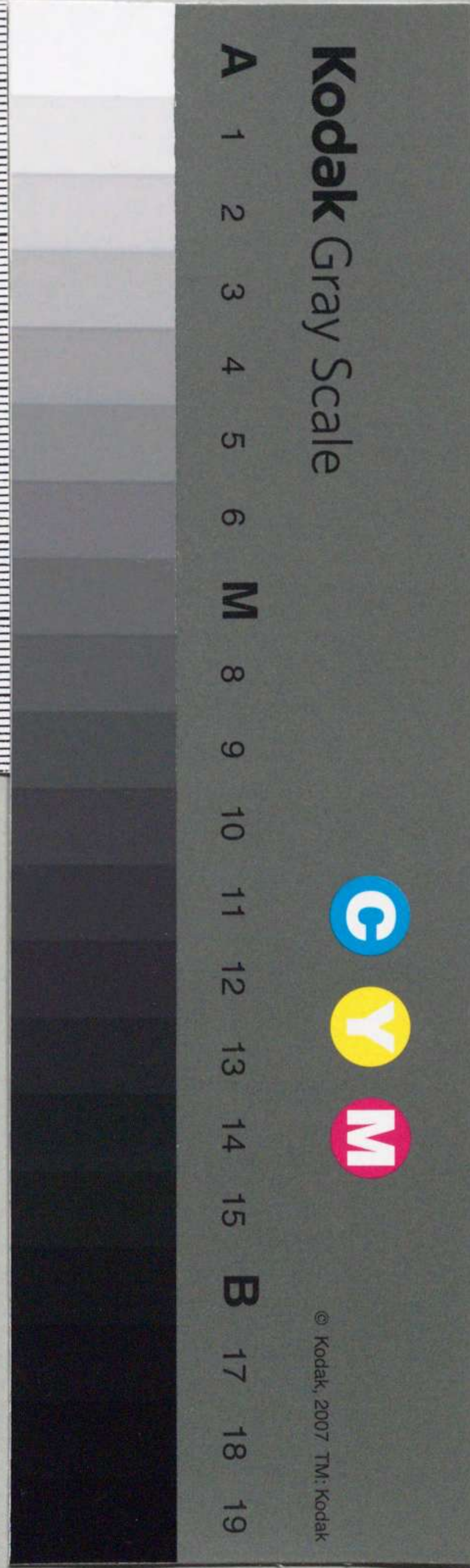
卷三卷十ノ二冊
従来欠本

内閣文庫		
和	三五四	類
書	八	號
架	冊	一
函	九	八

百一番

和	三五四
書	八

内閣文庫		
番號	和	32548
冊數	8	(1)
函號	183	786





上水記總目錄

第一卷

玉川神田女上水綱領

第二卷

玉川上水多元繪巻并諸桿圖

第三卷

玉川上水多元諸桿大サ水門大サ投渡木
蛇籠大サ水番人預道具筏通之村石

堀通村の持場回数橋敷分水寸尺取
始く年月より水口絵巻

第四卷

玉川上水羽村より江角分水書屋まで絵巻

第五卷

玉川上水江角分水書屋より江角分水掛絵巻

第六卷

神田上水より森路より目白下附測まで絵巻

第七卷

神田上水目白下附測より江角分水掛絵巻

第八卷

玉川上水通法右通書付神田上水汲養十郎書付

青山上水向水子川上水岳有上水傳説

大概

第九卷

玉川神田上水より札子写并末流水車改書付

第十卷

上水掛代記并あ上水地書清箇本岡出根石言

北集方并水根集集後白垢後後後集附

白垢通流下水橋後旦水昔人給余水昔人

与方同心白垢見与後水料并事水掛

之量見与掛川之事

外 昔年貞代官水之納と相成之事

後通瑞運上水官水之納と相成之事

第十卷

右者地書清箇本岡出根石言

或と核書し之の増補し今按る箇を

加地理水の根老し之を採巧者ふたり記

重ゆらとの之去年庚戌年おほやけの中て

あ上水の水源はゆらとの之も世年しこの

内かしく一日の見雪が多き水口流桿を介すも

ふらしくす尺さし見系ふらなるれ



大ナ同敷ホ前々波下の書年りよまるはる筆のり
よ水函の同敷所敷里敷と又同ー程つま
切ーりかーん事をととむきの事をとがー
わーりふちーし海脱崩散後勘加筆とまわて
正徳活字の波下小納をくものか

寛政三年

正徳活字の末方道方

辛亥亥

石野遠江守原廣通

凡例

一上水記十卷全文信書點畫誤りかーりこと
網の字細書森と敷と云後と後と書極と極
とと愚百姓と百姓と云敷くよーと一と
市とわーりさうふんとと事なぬーかつふ
とがへ急の敷又同のくよーと大田とと折上点
折ぬ敷師よとよのりと又寺の若く智願寺を
智岸寺とととと敷程あり

一 舟の字は楸の類掛梓小正字と云う神中汲水の
書年ふ海ふを新橋別橋と云ふとて楳橋と書く
一 茂字書換しつゝ小志り一 刺字又新渡と
書て車は、草稿と云うて是の心は編急なり
法書の多さわゝるふと云う也

一 古語傳流軍抄る小酒と云う也
一 前より神田武川と唱ふ又武川神田と云ふ
一 一より多と云ひ記と武川里村と多り場廣

なるゆふ武川と云う一 神田と改らぬ書この書面は
書この用なるゆふ不同ふ書哉と

一 飯塚常一と出代官制と云うて今、野田文房なる
素と改るる本とあり改るる本とありと云ふと云う
ころ所ふと云うと改るる本とありと云ふと云う
と改るる本とありと云ふと云うと可憫と

一 此書稿の書ころは上水田常流定法負人ありと云う
死ころめらるる不定法負お止候と定法負の存月

書中少々のさうれと上水出根の集子を拂のはたは
こぼふりしにせむさう人の事を情ふりし一又定法須
人持場のりしものさびに組合は當法に由當法に由
書改ふふりしにせむさう人の事を情ふりし一

一繪巻相筋救遍はしりしと上中のまを流してまは
古圖とを據りし具跡と摸索し一その標とを記し水相筋
と考てまを大くしりしにせむさう人の事を情ふりし一自
記のさびに水口のまを記しりしと考て相末枝相筋記し

一五川の川上一の形は甲斐國都留郡之南玉の事なりと
しりしにせむさう人の事を情ふりし一
郡の名を記し二卷に水に大サ茶門に材の事を記し

甲斐國郡は忠告なりが不君しりしにせむさう人の事を情ふりし一
河館の郡を記しりしにせむさう人の事を情ふりし一
五川の道に記しりしにせむさう人の事を情ふりし一
こころのまを記しりしにせむさう人の事を情ふりし一
少人録の事を記しりしにせむさう人の事を情ふりし一

辛亥秋

右と水記戊申年より廣通編輯今年辛亥
やうく第拾七巻と申す廣通字改及冷床松廣陳
其事一考しうし此書は字棟梁定次郎貴道小
圖説のしむけ後と水字の道とありともありと
を懐くあり

と水記一

江都と水記のしむけ玉川神田の二水ありと云
ふにとせむいふ玉川と水記の井の所の記ありと云
神田と水記の先年よりとありと云ふとありと云
ふとありけしと云ふと云ふ玉川のしむけ又と水記有
とありけし記あり八巻小傳流大概とありと云ふも
今廢しと現存のしむけ記のしむけ如し地中よ
樋と云ふし井と置樋ありとあり目井あり樋あり

補志

土中ふらふは井池池よふあり又高井を池あり
分水の石よつうを井ありふら井のやをわけて
ふ池と常ふ考ふ江戸をりのも量るにの義
池記の才十志りゆ井少てせよよる登り池
梅なるふふのふ下り流梅をいふはせよる池の
高池に志こふ志りゆもふなるいよふも
かふらふ一志りよとて水勢を増又河又か場の
ふ底と流るふとわりの志と流梅をいふ橋の下ふ
そめて向ふの池ふつるふとあり流梅をいふ又を池を
いふ石をて流をなすふ力率梅をいふ池が流るふを
白^{ニラ}梅をいふ池方よふ志^ス梅をいふ井と梅ふたを
うぬふけらふと井ふらうと士農工高給夕使と使
こしとよふこしよを流るふとわりの志と對しての
名なるふらふ一志りよとて川は西の方甲斐佐濃兩國の
小川より多波山の出水と流出て大河なる砥江ふ
筋^{サカキ}とくふ焚ふ入る底がーこしよけ山岩の詩乃

出投、家漢之家語二

三怨篇

夫江始出於岷山

其源可以濫觴及其至于江津不航舟

不避風則不可以涉云和漢いつくも

幾千里一東の方將田浦の方とて海小海也凡

早余里云又云甲州鴨沢村武品尚津浦村境より

武州武川といふ尚津浦より將村まで川丈凡十余里

將村より六所川近川丈凡十六里といふ夫は六所の流

といは川の末又云武川の元甲斐武一、流といふ不之

又より黒川といふ右へ流るの流鴨沢へ流武蔵乃

尚津浦より武川といふ又より川野村の内糸村境村

氷川村へ流る一、流より將村近二十里尚津浦より將村と

十二里一、流より尚津浦まで八七里余黒川はむの

金山の流あり民家なり一、流より尚津浦まで八

里ともおありたりといふ川丈一、流より凡四十里をり

尚津浦より武川といふ場創凡三十里をり一、流より

と流るは川は多波河といふ多摩郡より

てげおよふ河川とてはけりて流あをとも多磨の磨
る字まともをともむる馬の字とまともをともむる

漬小田一ツれと磨波二ツの唱地とていふちてなすふ
とわ〜ももとも〜のお智めや多磨の磨麻年麻

紛々傳名沙小波ひ〜磨の字と西字とす〜傳名

類聖沙 源順作延長之頃
寛政三十九年 小武蔵国府在^{多磨}多磨歌多

磨^太婆^太とての時ただるよみせりこりふ〜道とも傳名

沙より以^糸萬葉集 諸兄撰一説家持
凡十年 小多麻河のちと

萬葉集中十に武蔵國方の仲小多麻河泊

爾^ニ九^カ良^ラ須^ス氏^テ豆^ツ久^ク利^リ佐^サ良^ラ九^カ良^ラ爾^ニ奈^ナ仁^ニ

曾^ソ許^ユ能^レ兒^コ乃^ノ已^コ許^ハ太^タ可^カ奈^ナ之^シ伎^キけち拾遺集

小^ハ下^ノ勺^ノ首^ノの人の意〜さやちをこあり六帖よぬの

不^レ下^レ勺^ノ入^ル〜下勺拾遺集小因〜定家歸建保

名刺百首の奇拾遺集上小入子はくやら〜也

垣^ノ添^ルあゝいさ海とつ〜ぬさいぬま川の里は百首

小家陸々玉川小し〜もはく〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ

口部のありきとせしむる代々の号人皆玉川に濱り

たりし多波河実若くそ奇くそハ河の優なりなすて

玉川といひまより世をとりて玉川といふ死てはくハ

洞布之田次義章とむし一野地若考

享保二十年小作

或古記曰多磨河出諸嶺及ツミガキキトリノクラ鷗鶴等亦里人作

洞布納内藏察とけ文而世よある糸の或成玉風土

記に見ゆは書た一一くあり書ゆ古記にむり

義章書くるりく一一去人ひきく一の布といは川

内一一頁と成てはくうよあるきく一のやあは

新撰六帖ぬのありき川に織とてしめはけりハ

浪乃いけくうよりとやんる衣の目太い布もよはけり

の奇ま布抄布の布ふあり又一の義章の書小多磨

那布多村と布をいふといふとせるおやにあるを

志る海一一中和法も字音を解はし人くあ一一

麻布とあらぬのいふといふ人ありいふいふのふと

ぬのいふいふのふと布いふのうるまもは麻中と

中いよめがうまのあま麻うくせもる本とてこの
麻とてしるる布織く玉川にまきせるありし
武彦も武美とがたひるまの流る本とてむすの
河と解きし一と流うに用がられ八田書次
うまうまの事もありし麻とて玉川のまゆり
うまうまの事ありし神田も亦尚まの古に地名く
倭若野西吉沙も湯治ありて神田が武彦國
風土記中の湯治の次に神田あり若うもまゆり

は書伝用一か一一のまも神田の地名久一
あや井の改り池は津野こりふあま若福寺こり津七
寺ありしと地内より筋遠ふけ井の改の池いよめ
江戸熱麻子こり古に信書ありまも井の改の池
神田よ水のま武州多摩郡之若福寺中と池あり
け池と名水か一一の經文村こりあまて井の改の
流の流合て神田よ水の助水とせらる凡三里たうり
りよ井の改り池は田原のやふあまあまあま

混とく〜次又并平流〜いふは是ハ小瀬橋より
二里程あり〜并平村法苑宗妙正寺〜いふ寺の
地中小池あり〜壁横十に及同〜いふ池より清流て
岡村中流井村迄より流落合て落合村迄より物あり
こがら世系〜と池ありて清流〜いふ物あり〜と
いふ井の改の池吾福寺の池妙正寺の池〜いふ落合
いふ小落合村の落あり〜いふ池より〜いふ清流
とあり〜井の改と川と水路〜いふ村の橋のあり〜

若浪凡十八町と市の人河〜池の由り〜いふ村吾祥寺村
あり池の中小辨賦天の社はあり〜川邊大盛寺〜いふ
社荒廢小及〜いふ池反別〜町之反に町余〜と多摩郡
吾祥寺村名〜十町在流〜中〜
紐四七歩あり〜
いふ坪数
至方六町十一坪早魁少と凡のり〜事なき〜いふ池之
吾祥寺村と吾祥天女〜いふ市あり〜と也市の人よ
吾祥寺村と吾祥寺と云寺あり〜約地吾祥寺の
旧地乳〜いふ〜い〜追て可考大盛寺の古名吾祥寺

此のいそんハ江下小跡會の養あり一ハ池小

神君様 御茶の湯拵ハさきハ長沙系のもろ小拵拵

ハさきハさきハ井口ハさきハ井の如くハさきハさき池乃

江小ありて建礼あり 建礼文玄神曰よ水 給ふありて

沙系のもろ小拵きたるにさきハてハ流沙系のもろこ云

池小道と名ハさきハさきハ幸夷の本あり

大猷院様 御小刀ハさきハ井の改ハ 御小月沙彫刻

建礼ハさきハ切納め守の汁おさなる可今ありあり

建礼あり 建礼文玄神曰よ水 給ふありて 池の邊ハさきハさきハさきハ頃御殿

と建礼ハ今御殿ハさきハ南光坊信正二七日の修治ハ

池中七五番湯ハ出来迄ハ七井の池ハさきハ柳の古樹ハ

大猷院様 御楊枝のしハさきハさきハ建礼ハ 建礼文玄神曰よ水 給ふありて

野史村老の流ハ本ハ明ハさきハさきハさきハさきハ

ハさきハ後勤ハさきハさきハさきハ 御茶のもろの本ハハ彫刻の本柳の

ハ池名ありハさきハさきハさきハ 給ふありて 給ふありてハさきハ

村ハさきハさきハ公村ハさきハ公村ハさきハ田村ハさきハ

日向寺の下よりと出水とつら余り大流地より
日向川の中を日向と日向川にけ流神田川の中
より神田の中より勿論神田の遠く出水と用と助水
玉川よりなる流等小くして又唐土までと
池とあると他方小なる事之才等今のところ

架槽三才圖會架槽木架水槽也間
有聚落各水既遠各家共力造木
為槽遞相嵌接不限高下引水而

至如泉源頗高水性趨下則易引
也或在窪則當車水上槽亦可
遠達若遇高阜不免避礙或穿鑿
而通若遇拗險則置之木駕空
而過若遇平地則引渠相接又在
右可移隣近之家足得借用
連筒又連筒以竹通水也凡所居相
離水泉頗遠不便汲用乃取大竹

内通其節令本末相續連延不斷
閣之平地或架越澗谷引水而至
又能激而高起數尺注之池沼及
庖福之間如藥畦蔬圃亦可供用
杜子美詩連筒灌小園駱賓王詩
剡木取泉遙

渴鳥後漢張讓傳作翻車渴鳥註渴
鳥爲曲角以木引水上者也

古雋考略云渴鳥受水之器如鳥
之渴飲也

史記河渠書乃鑿井深者四十餘丈往
往爲井井下相通行水水類以絕こわハ
井とほりて地下とせし今ハ井戸の如くハ
一と志うと掘の儀ハかゝるや早竟者ありてあり
流せぬといふるや戸上水のよしくしむせむいふて
井のふし用るといふたより通鑑卷百八十隋記云

煬帝大業元年開通濟渠自西苑引
穀落水達于河復自板渚引河歷滎
澤入汴又自大梁之東引汴水入泗
達于淮云々類桂中納言敦忠らあることとの
山名の跡は音母川せう入てかたし中流此
せ六人のころ後のふんえとよらるる松遺雜よ小
入河勢のよめる教和漢ともいへることせう入は
事いあまのいさとも田の或る處の地を用たらし

管一梁臺秘抄徑馬樂の田中の井戸のふちと
たるの井とひひくさるなるはあといふふ

兼良公の忌業抄田中の井戸は田をけらんためり

井のしひの池とありてあてふること日本紀神功紀

引カセテ灘ナカ河カハ水ミツ欲スツ潤ケト神田ミトシロタニ云々又城の用より引奉

常之太系記の赤坂の城のふちの地は厚く極と
少せ城の中より入るようふんえちちやの城は
用出とていへるもの大切なることあり

卷第九

凡そ一と云ふと江戸表のありたるといふことあり又
菅長養義水利と云ふは江戸の経とせしむるは書
崇禎八年太倉張溥序各卷首毎吳
郡張溥刪正又濟水東阿の井の事清閭山
傳澤洪所著行水金鑑補翼行水志
濟水圖末濟水三伏三見之說由來
舊矣沉村中言歷下凡發地皆是流
水世傳濟水經過其下東阿之井乃

濟水所爲蔡氏引以證濟之伏見云々
かゝる東阿の井は濟水の源と云ふことあり然るに
地は濟水と云ふは古くは今も同じくは濟水の
源と云ふは彼濟水の伏見の流とて歷下と云ふは
凡そ一と云ふは皆は流は是と云ふは濟水の源と云ふは
流と云ふは濟水の源と云ふは濟水の源と云ふは
白河の源と云ふは濟水の源と云ふは濟水の源と云ふは
人知るとも傳世の書と云ふは濟水の源と云ふは濟水の源と云ふは

白氏文集卷六十八錢塘湖石記曰
郭中六井李泌相公典郡日所作甚
利於人與湖相通中有陰竇往々堙
塞亦宜數察而通理之則雖大旱而
井水常足西湖志是也西湖志
志卷一曰唐代宗時李泌刺杭州閱
錢塘瀕海市民苦江水鹵惡難以安
土始鑿六井開陰竇引湖水以資民
汲民甚利之西湖志相國井西
井方井白龜井小方井金牛井咸
淳臨安志西湖志清
雍正帝命西湖志編成書也又西湖志咸淳
臨安志紹興十九年以西湖志近來穢
濁堙塞詔郡守湯鵬舉措置遂用工
開撩及修砌六井陰竇水口增置斗
門閘板量度水勢通放入井且條具

事宜び文とんを注しうもれらるるを記しきとて
筆てを理しりやと志しきしと入んたり

又八編類纂明陳仁錫輯編小水匱キニヒの汲山の諸水

らたてて是を運道するに身の中水の研の敷れ又用の意あり

用ハ桶と同ハ版とハカハフ蔽すりては字彙ふりては水

は水口のキナを敷きしりては字彙の沈漕艘

注来し出りしりては版を没て出りしりては

水を用て水と相するりては版を没て出りしりては

時ハ水を用て水と相するりては版を没て出りしりては

水を用て水と相するりては版を没て出りしりては

水を用て水と相するりては版を没て出りしりては

水を用て水と相するりては版を没て出りしりては

水を用て水と相するりては版を没て出りしりては

水を用て水と相するりては版を没て出りしりては

水を用て水と相するりては版を没て出りしりては

水を用て水と相するりては版を没て出りしりては

多山元年よりなりて其切通一坂を造りて
かゝる事係セ當年お止り八巻くまらば

かゝりて火災なりけり水道を小川町へ火災なりけり

もたの省なりけりぬ事なまのありてよりけり

くる事なり

一と水石樋をいれりもなりけり水樋を石にて作りて水

の流る節を石を石の石より流るなりけり

一と近年石樋をなかりける柳堤の流流地場の石樋の

浅事なりけり土の志まりありけり市を流るなりけり

妻と流るなりけり流るなりけり

車馬の通ひなりけりなりけり

石樋をつくりて土地の疎密場所の言海出路の流弱

も水の多寡をなかりけりなりけり

尾樋をいれりなりけり

下りのことなりけり

かゝりて水道をなかりけり

り川をいれりなりけり

おもむきあるを

私に或るものありて其の地を府中の名井と
稱し地中皆山ありて水は清く流るるを
事なり又地味は硬く泥あり故に
又ハ潮氣あり濁水飲り今程か
古代か〜のあり〜掘るの井の若武蔵
ありハ一ノ名のあり〜の今ハ井を掘
るあるもの我集む〜野のゆるり

井とあるものあり〜の今ハ井を掘
るあるもの我集む〜野のゆるり
皇太后宮女後成

一 或人云書日記とあり〜の〜兼徳元年九月明曆

江戸なる西法冷水あり是武蔵の名水なり
流るるを江戸川漲〜の百姓の渴をゆるさ
る

尚余〜と云るは〜石と繋ぎあるの田畑は
い〜年月と経て今年中成就〜長流

城下より東に流るる川は文面を耳に北に流るる川は
川水今も東流に又北に流るる川は若くは若年の田加
と貴しとある川は事くは川水とく川水と
川水と川水のやい川水と川水と川水と川水と
若年の田加と貴しといふ川水と川水との川水
小物と川水と川水といふ川水と川水と川水と
川水と川水の川水と川水の川水と川水の川水と
川水と川水の川水と川水の川水と川水の川水と
川水と川水の川水と川水の川水と川水の川水と

一 玉川と河門事ハ詔ノ末船ノ見申末船
卷之十に仁治二年辛酉十月廿二日丙子武
藏野可被開水由之由議定訖就之可被
懸上多磨河水之間可爲犯土之儀
至寛政三年
五百五十四年
川水と川水の川水と川水の川水と川水の川水と

一 玉川よ水の事一明和み子年ハ若所を以て
町年を以て川水と川水の川水と川水の川水と

そのよりより清和時の古の書寫の云々兼意

元正元年 寛政三年近
元正四十年 までハ

佛城内英佛城下と水道のわたりとてハ

市との沼沼池かとのよりと汲梅をてはを以用

て石自由なりとてハ

私云赤坂沼池も汲たりとてハ

あつとて井の池の池といは文句といふは

津田と水えより汲り十町といふは

井の池の方始りて十町と書面の跡来

証也

と水道よりとてハ氷満町を以津尾の岩を尋

らりてと川を流る清右衛門といふ者友人の

又云と水よりとて武州相村といふ所より

と川よりとて江戸までと道法十三里の云々

一説に平河某の古河某と考ふるはとて野火の云々
ハハ橋川の橋割といふ古流伊豆殿と云々又云古河某の
那方の没人安根金古某の云々といふ人ハ中々吟味とて野火の
と水出第中云々

和云河豆与佐細船后川越領地と云
野火而と船内と云をりのみ玉川
より川より出来初て野火而船田地と
出来より又してを滅く武蔵出ると
田代と云今以野火而造井水人
玉川のそりより斗とて言ふより云
ふ

常憲院様御代右系宗權貞船后船と野火

船お右右船地小と今と右船地之船内の
平林寺と佐細船后の時武列岩櫻より川寺
よそ一族善提可と云

川月水よりと云と右船書舟より河定可と云
出ると云り川老中阿船書後与松平河と云寺社書り
安反右系之船平出雲与神尾船宗与町書り右船と監
牧野織部八木勘十郎川勘定なる船根河船海舟人
河系中船宗
玉川在右河河船宗の書舟の船と云此も河系
と云てたると云と云及

徳島書月一洗く川見ふとて牧野誠録外郎
伊予廿十席と水道無う店名也法匠書角とて
道為六日の道るよと見ふ洲江戸系同年
十月廿又日海を市とてと水道増並清はるう後
あ人の中流也己年に月日ヨリ据初日年十月
十月日述は谷大由すて据流也玉川より
仕を——との義をて相村大川とて堰仕之水
はをり糸正滞は谷大吐すてよりをり糸の更り

虎也糸道名残据とて十ふ小世滞の糸うと後
進ふ水ありて流方と出ると用のうとて材方
ふ水は糸と糸ふとて
津也丸美吹と糸をり糸何年よりとて糸後進と得
あらとて——糸外は河内流方とて糸梅うハ何年
よりか——糸何年よりとて糸書留法書角とて糸
高時を流す徳島よりとて

四谷大木戸中門扣板の石小彫刻の如し

玉川上水道自四谷水門至赤坂石柵

石垣石蓋之御普請大工

柏木三右衛門

神田茂左衛門

延寶六年 戊午八月二十三日

一 神田上水の事 神田上水元より汲養十席のこしを毎水六

酉年同八月年題書に由し一は九子年紀有く一白

川谷の澄投すく小付題書に由し上水元より汲養十席のこし

清負投すくしを以て出清投し一入札投しは

一 中流に於て願書英由緒書お添ねせ年八月

幸山但馬守丸毛和泉守山川下流に根原九郎左衛門上

書ありけ何下りたる也右書有て澄投難し用ひ

しともす大略とし

神君様武彦野 清成と云ふ水元より汲養十席のこし

右養十席の書局の中小流祖之次郎清右衛門

武彦野通りし時清成と云ふ年挽飲より清成の

而くは彼ら新地中より果水湧出する事と
存知右の邊の土地を穿試する小なる乳甚可愛
ゆに淋と云はれ大鬱たる小地底より土砂と砂
ころ小よりて掘廣げ大池小を發し其量又更
小於並濟府内一川に流注小出水出ぬべし
其水不小達し其後
神君様御尊野 濟成り其彼地の業地は
以付入上流よりして彼とのいふ祖より

云傳しよりしとのこく澄澄なり又果水湧出の
長は久遠有る乳壺井神社記云壺井二十、頼義云
義家と奥州安倍氏に征伐の時、天喜二年夏
早登して法軍渴し將小大將馬より下りて其
と腹し天を洋し彌と云岩壁をくちりて其
冷水をく湧出し其官軍咽とくちりて其將小
凶徒と攻破し其神湯と感しけりて壺中壺
推りて其鼓旋の時河内の若城音信流がらんと

又より地をひと重井に改令神水と稱せ是に
いふをいふ一澤余右衛門家の附書中にも是に
をいふに書きて是水涌出する所をいふま
これと記述いふ日景行純ふん息作の息水の
小涌とて天宮冷水と云ふるにちて小た
こふの天神地祇ふりて息を泉涌出する奉
又世に傳ふ福尾山とて弘法大師呪ふ水
といふ出づる歌といふるに及

台徳院様 御成あり井の改をいふのあり

御子自御彫刻せしむるに一と一と但宗文院に記せる

彼池の遙乃建札の義名をいふ長徳院の尋りて

大猷院様井の改をいふ切月抄に記せるに書ける

寛永年中

大猷院様方に、上流をいふ水密敷出するに
いふに、右に記するに下流今に山景の水
右ありといふ彼池のほらりの建札の義に

神君様御茶の湯は抱きつるよやくの丸ゆ井の
よりえあるるゆやく井の跡といふことあり

右命ありて呼吸といふは呼吸の事と云ふは又

その一呼吸の事と云ふは又呼吸の事と云ふは又

書出せりといふ日といふ名呼吸の事と云ふは又

前後の事なるつらき一呼吸の事と云ふは又

書面よりたけ記の中へ書きし後の考とす

とくくよふようくの事とも巻とつらき事あり

本草巻首の月詠の如し一本草綱目巻五云飲

資_二于水_一食_二資_二于土_一飲食者人之命脉

也といふ事あり自由の如し井とつて是と飲とす

や〜くはけよ水の徳は是ふありつらき事の如き

はげしき物〜とよふけを流るるに政の

いまのいふに政の流を〜とよひ〜人

そのにいふ〜とよふ〜とよふ〜

思ふ〜とよふ〜とよふ〜とよふ〜

よ〜とよふ〜とよふ〜とよふ〜

上水記一畢

廿

七

廿

七

廿

廿

七

